児童のポジティブな言動をポジティブな方法で支援する Approach

～PBS による個別支援・学級支援・学年支援の実践を通して～

庄司　宗由（教育実践コース）

1　問題と目的

現在、学校現場では、不登校、いじめ、人間関係トラブル、学級崩壊などの様々な問題が生じており、教師はその対応を強いられている。

私が教職に就いたばかりの頃は、目の前で起こっている問題に対して、解決しなければならないという思いから、教師主導の指導を行うことが多かった。自分の枠組みで物事を判断し、自分の思いを伝えてその場を解決に導くといった一方的な指導である。しかし、そのような指導では、その場に相応しくない言動を止めることはできても、児童自身が望ましい言動を理解し、実際の行動に移すことにはつながっていないのではないかと考えるようになっていた。

また、ここ数年は生活指導主任や特別支援教育コーディネーターとして全校児童と関わる中で、児童一人一人のコミュニケーション能力の低下、問題行動の多様化などから、対応の難しさを感じてきた。さらには、様々な教師と関わる中で、教師によって問題行動への対応の違いがあることが気になった。対応が様々であると、何が正しいのか分からない、どのように行動すべきか混乱してしまう児童もいるのではないかと考え始めた。

そこで、まずは、どのような支援方法が児童にとって良いのか、教師はどのように支援を行っているのかについて明らかにしていこうと考え、実習校の教師の授業における支援方法について分析・考察を行った。その結果、教師一人一人が児童の表情・声・しぐさ・態度などをよく見ながら教育活動を進めていることが明らかとなった。しかし、それらは無意識に行われていることが多く、また、優れた支援方法が共有されていないことが課題だと考えた。

そこで、本研究では、「教師と児童の関わり方」と「有効な支援方法」について明らかにし、全教職員で共通理解を図り、それを踏まえた上で、教師一人一人が同じ姿勢のもと教育活動を進めていくことを研究の目的とした。

2　クラスワイド PBS（以下 CWPBS）の実践

先行研究や大学院の授業の中で、教師と児童生徒との良好な関係性の構築や問題行動への適切な支援として、積極的行動支援（Positive Behavior　Support：以下 PBS）があることを知った。PBS とは、応用行動分析学に基づき、望ましい行動に注目し称賛することで、結果として望ましくない行動が減少していく支援方法である。私は、PBS で児童生徒と関わることで、特定の児童生徒の問題行動の改善だけではなく、学級全体や全校児童生徒の望ましい行動の定着にも効果があると考えた。そこで、PBS の有効性について確かめるため、高学年の学級と担任を対象に研究を進めた。

(1)　研究の方法

筆者がコンサルテーションの立場で担任と関わり、担任が、学級全体へ PBS を行いつつ、個別支援を必要としている A 児へ応用行動分析を中心とした支援を進めるためのサポートを行った。

(2)　研究の実際

筆者と担任とで、PBS に関する基本的な理論・取り組みについて共通理解を図り、PBS を進めた。取り組んだ内容は次の２点である。１点目は学級全体への支援である。PBS を意識して、児童の様子や反応を見ながら、望ましい行動への称賛を心がけてもらった。２点目は A 児への個別支援の充実である。A 児の行動を記録、分析したうえで、サマリー仮説を作成し、支援方法を検討した。実際の支援方法は、①行動のルーブリックの作成、②日々の行動の記録と得点の累積、③振り返りの場の設定、④保護者との連携である。

(3)　結果と考察

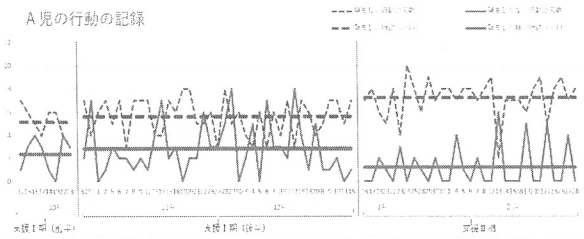
①学級全体の変容

アセスの結果から、どの項目においても数値の向上が見られた。特に、生活満足感、教師サポート、友人サポート、被侵害的関係の数値においては大きく向上した。教師が、児童の望ましい行動を称賛・価値付けすることで、児童との関係性が構築され、教師サポートの数値が向上したことが考えられる。また、教師自身が望ましい行動に目を向けて称賛する姿が、児童に

とってのモデルとなり、児童も友だちの良い行動を真似たり認めたりするようになっていったと推測される。その結果として、友人サポートの数値向上につながったと考える。児童同士の関係性が向上することで、相手を傷つける言動は減っていき、その結果が生活満足群や被侵害関係の結果として表れていたと推測される。

②A児の変容

A児の望ましい行動と望ましくない行動の回数を表したものが次のグラフである。



1月に入ると、望ましい行動が大幅に増加し、望ましくない行動が大きく減少した。A 児、保護者、担任、筆者でそれまでの取り組みの成果について共通理解を図ったことや家庭からのフィードバックを約束できたことで、A 児にとってこれまで以上に意味のある取り組みとなったことが予想される。一定期間、個別支援を行った際、本人と話し合う場を設け、取り組みの確認と修正・変更を行うことの重要性、学校での取り組みを家庭に伝え、家庭とも連携して取り組むことで、支援の効果がよりいっそう高まることが見えた。

A 児のアセスでは、「教師サポート」「友人サポート」「向社会的スキル」の項目において、数値の向上が見られた。特に、友人サポート・向社会的スキルに関しては数値が大きく向上する結果となった。教師が A 児や学級全体に対して肯定的に関わることで、A 児や周りの児童へのモデルとなり、より良い関係性が構築された。その結果として友人サポートの数値向上につながったと考えられる。また、望ましい人間関係の構築に付随して、学校生活におけるルールが身につき始め、向社会的スキルも向上したと考えられる。

(4) 成果

CWPBS の成果は、次の３点である。１点目は担任と児童、児童同士の関係性が向上した。また、児童同士の関わりでも、認め合ったり、助け合ったりする姿が多く見られるようになった。PBS の有効性が確認できた。２点目は、学級全体への支援を行いつつ、個に応じた支援を行うことで、関係性の向上、行動の変容が見られた。教師の関わりや姿勢によって、児童の行動が変容することが明らかとなった。３点目は学校の取り組みを家庭と共有し、連携を図りながら支援を行うことで、より効果のある取り組みになることが明らかとなった。

(5) 課題

CWPBS の課題は次の２点である。１点目は、担任一人でも支援できるような取り組みの検討である。今回は、筆者がコンサルテーションの立場で関わりながら CWPBS に取り組んだ。しかし、実際には担任による支援が中心となる。誰でも容易に行える支援方法を検討していく必要があると感じた。２点目は、望ましくない行動が見られたときの対応方法や支援方法の共通理解である。望ましくない行動が見られた時の対応については、注意・叱責に頼らないよう提案はしたものの、どのように対応すればよいのか筆者と担任とで共通理解が図れていなかった。PBS での関わりを基本とした中で、望ましくない行動が見られたときにどのように対応するのかについて検討し、いつでもだれにでも同じような対応が行えるようにしておく必要があった。

３ 学年ワイド PBS（以下：GWPBS）の実践

CWPBS による取り組みが一定の成果を上げたことを踏まえ、筆者が担任する３学年全体で PBS を行うこととした。

(1) 研究の方法

学年全体で PBS による支援を行うために、次の手順で取り組みを進めた。①PBS についての共通理解、②教師間での目標設定、③児童との目標設定、④計画・実行・振り返り、である。

(2) 研究の実際

① PBS についての共通理解

年度初めの学年会において PBS の共通理解を図った。筆者から、注意・叱責による指導ではなく、できている事や望ましい行動への称賛を中心とした指導方法について説明した。また、学年の児童全員を担当する教師で育てていくことのメリットとその必要性について話し合い、学年共通で行う支援方法（称賛の声掛け、教科担任制、トークンシステム）を決定した。

② 教師間の目標設定

約１ヶ月間、学年全体で PBS を行い、児童との関係性の構築に努めた。PBS について確認し

た後、学年全体の現状と課題について話し合った。その結果、切り替え、話の聞き方、言葉遣いの３点に課題があることを確認した。

③児童との目標設定

６月初旬、学年集会を開き、これまでの頑張りやできている部分を称賛した上で、さらに良くなるためには何が必要かについて、学年全体で意見を出し合った。話し合った結果、目指すべき目標を、①切り替え、②話の聞き方、③言葉遣いに決定した。この３つの目標を「３つの大切」とし、授業中、休み時間、給食時の場面においての具体的な姿を設定した。

3年生「３つの大切」

もっともっとよくなるためにがんばること

時間＼目標	きりかえをはやくしよう	先生や友だちの話をしっかり聞こう	すてきなことばをかけよう
授業中（教室）	①授業のはじまりに教科書とノートを開いている。	④人が前に出たら体の向きをかえ、目を見て話を聞こう。	⑦友だちのがんばりに、はげます言葉をかけよう。（おしい、がんばれ、など）
休み時間	②休み時間が終わったら、席に着いている	⑤友だちの思いや考えを聞きながら遊ぼう。	⑧ふわふわことばをかけよう。（ありがとう、ごめんね、いいね、など）
給食	③15分でじゅんびを終わらせよう。	⑥もぐもぐタイムでは、口をとじて放送を聞こう。	⑨「いただきます」「ごちそうさま」を心をこめて言おう。

④計画・実行・振り返り

学年の児童が、「３つの大切」を意識し、実際に望ましい行動ができるようになるため、①朝の会での目当ての設定、②がんばりシートの学級掲示、③ビー玉貯金、④日々の行動の記録と振り返り、を行った。

(3)　結果と考察

①児童の意識と行動の変容

アセスの結果を見ると、どの学級においても、春先に比べすべての項目において肯定的評価が向上した。教師が、PBS で関わることで、他者との関わり方のモデルとなり、その姿を真似ながら友だちと関わる姿も多くの場面で見られた。教師と児童の関係性が向上することで、友達との関係性が向上することが明らかとなった。教師や友だちとの関係性が構築されていくと、他の項目（生活満足感、被侵害的関わり、学習適応感）も、安定し、数値が向上していくことも見えた。学年全体で教師の関わりが統一されていたため、どの教師の授業でも同じような支援を受けることができ、児童は望ましい行動や関わり方を理解し、自分たちでも実践しようとする態度へとつながっていったと考えられる。学年全体で、目標や達成のための具体的な姿を設定したことも、数値が向上した理由として考えられる。

「３つの大切」に対する児童アンケートを、５件法で実施した。結果は次のとおりである。

「３つの大切」児童アンケート	
（１）「３つの大切」について	
①３つの大切に気をつけて学校で過ごしてる	4.3
②学校生活が良くなっている	4.3
（２）「切り替えをはやくしよう」について	
③授業準備や後片付けを早くしようと気をつけている	4.4
④給食準備を早くしようと気をつけている	4.7
⑤いろいろな場面で切り替えが早くなった	4.4
（３）「先生や友達の話をきっかり聞こう」について	
⑥体の向きをかえ、目を見ながら話を聞こうとしている	4.5
⑦友達の意見や考えを聞きながら過ごしている	4.6
⑧話の聞き方がよくなった	4.4
（４）「すてきな言葉をかけよう」について	
⑨励まし言葉やふわふわ言葉をつかっている	4.5
⑩仲良く勉強や遊びができている	4.7

どの項目においても高い数値の結果が得られた。児童は３つの大切を意識しながら学校生活を過ごし、実際に行動も良くなってきていると自覚していることが分かる。

②教師の意識の変容

教師アンケートを実施したところ、GWPBS については、「児童との関係作りの手立ての一つとして、とても有効だと感じた。叱る場面がぐんと減った。」「どの児童も、頑張っていることを認める良さを言葉で伝えていくため、自信のない児童や物事をマイナスに捉えてしまう児童が少しずつ前向きに頑張ろうとするきっかけの一つになる。」との回答を得ることができた。GWPBS による児童の変容については「良いことをすると褒めてもらえるため、自分から良いことを考えて行動しようとする姿が増えた。」「友達の良いところを見つけて互いに褒めるようになった」「前向きな発言や周りの友達の良いところに目を向けられるようになってきている。」との回答を得ることができた。

PBS で関わることで、児童が前向きに行動するようになったことや望ましい行動の増加を目の当たりにしたことにより、その有効性について感じていることが分かる。また、精神的ゆとりを感じることで、望ましくない行動が見られたときにも、冷静に対応できている点でも、効果のある取り組みだと言える。

(4)　成果

GWPBS の成果は、次の３点である。１点目は学年で統一した支援を進めたことで、児童へ一貫した支援が行われ、望ましい行動への肯定的な意識変容が見られた。２点目は、教師自身の意識や関わり方を変えることで、教授行動にゆとりが生まれ、落ち着いて対応できるようになった。また、そのような教師の姿勢がモデルとなり、児童同士の関わりのなかでも児童の良い

部分やできていることを互いに認める姿が見られ、肯定的な関わりが増えた。３点目は、学年で共通して取り組むことで、児童の実態の共有化、共通した理解につながり、統一した有効な支援を行う事ができた。また、児童と共に目標や具体的な姿を設定したことで、どのような行動が良いのかが明確となり、児童の望ましい行動への変容につながった。

(5)　課題

GWPBS の課題は以下の５点である。１点目は、望ましくない行動が見られたときに、どのように支援すれば良いのかの統一が図られていなかった。２点目は、学級全体への支援を中心に進めたため、個別支援を要する児童に対しての支援が十分に行えていなかった。３点目は、目指すべき姿や教師の支援方法などを家庭や保護者と情報共有できなかった。４点目は、GWPBS に対する児童の評価・振り返りの結果を、児童が分かるように視覚的に示し、取り組みの継続・強化する必要があった。５点目は、GWPBS を全校（スクールワイド）に広げていくことが必要であった。

(6)　GWPBS のその後の取り組み

GWPBS から明らかになった課題の改善を図るため、５点の取り組みを進めた。１点目は、全校職員への PBS についての研修の実施である。２点目は「３つの大切」の内容の見直しである。３点目は、児童アンケートの結果をグラフで示し、児童自身が振り返る機会を設けたことである。４点目は、個別支援が必要な児童への支援方法の検討と実践である。５点目は、GWPBS について学年便りや個別懇談で保護者に伝えたことである。これらの取り組みを行ったことで、これまで以上に望ましい行動が増加し、児童同士の関係も向上した。

５　２年間の学び

(1)　成果

私は２年間「教師と児童の関わり方」と「有効な支援方法」について明らかにしたいと考え、PBS の研究を進めてきた。研究から明らかとなった成果が次の３点である。１点目は、個別支援において PBS の有効性が実証できた。児童の望ましくない行動に対しての支援方法として、応用行動分析が効果的であった。問題行動の前後に注目し、教師が支援方法を変えることで児童の望ましくない行動が変容することが明らかとなった。また、行動の変容を促すためには、保護者との連携し、学校と家庭とで同じような支援を進めることも重要だと分かった。２点目は PBS の有効性である。教師が PBS で関わることで、担任と児童、児童同士の関係性が良くなり、教育活動を進めるうえで円滑に活動や支援を進めることができた。望ましい行動に対して、称賛や価値づけを行うことで、本人はもちろん、周りへも望ましい行動の具体的な姿が明確になり、児童の自主性や望ましい行動への変容、増加が見られた。３点目は、CW・GWPBS が児童の成長に効果があったことである。学級や学年全体で、望ましい行動を称賛されるため、目指すべき目標や具体的な行動が明らかとなり、全体として望ましい行動が増えた。その結果、互いに認め合える学級、学年集団に育てることができた。

(2)　課題

PBS を行う上での課題は、次の４点である。１点目は全校で共通した支援と称賛の声掛けである。学校全体が PBS を行えるよう、理論はもちろんのこと、事例検討など具体的な場面での研修を行うことで、基本的な関わりや声掛けについて共通理解を図っていく必要がある。２点目は、称賛と注意・叱責のバランスである。どのような場面で注意・指導をするのかを明確にし、全教職員で共通理解をしておくことが大切である。３点目は、全校体制で取り組むことの難しさである。様々な教育観をもった教職員がいる中で、PBS について共通理解を図り、全校で実践していくためには時間がかかる。PBS による児童の変化を通してその良さに気づき、少しずつ PBS が広がっていくようにしていきたい。４点目は、家庭教育との連携である。PBS が学校と家庭とで行われることでより効果的な取り組みとなる。便りや懇談会などの機会に情報発信をし、家庭と学校とが連携して児童に関わることが重要である。

(3)　今後の展望

今後は、全校体制で PBS の取り組みを進め、その有効性について研究を進めていく。そのために、教職員が統一した支援を行えるよう PBS スタンダードを作成していく。また、児童だけではなく、教職員一人一人の良さや頑張りにも目を向け、称賛することで、学校全体として向上していくことを目指す。

いずれは、どの学校においても PBS を中心とした学校経営、学級経営が広がることを強く願っている。